令和6年度　江戸川区立第三葛西小学校　学校関係者評価報告書（学校経営計画・学校関係者評価シート）

学校教育目標	智・徳・体の調和のとれた人間性豊かな児童の育成を目指し、「〈智（ちえ）〉深く考え進んで実行する子・〈仁（おもいやり）〉思いやりのある子・〈勇（ゆうき）〉明るくたくましい子」を本校の教育目標とする。	目指す学校像 目指す生徒像 目指す教師像	「夢や希望を育てる学び舎としての学校」 ・子どもにとって通うことが楽しい学校 ・子ども自身の夢や希望、子どもにかける家庭や地域の夢や希望を育てる学校
前年度までの本校の現状	成果 ・算数科の問題解決型学習を全教員で統一して進め、全国学力調査において国や都を上回る結果を出すことができ、授業改善の成果を出せた。 ・全校運動遊びの内容や方法の工夫・改善により、児童の運動意欲が高まった。	課題	・児童が自分の考えや思いを表出する力の育成や場の充実について、校内研究（国語科）を通じた手だての検討。 ・様々な教育活動の取組の様子や学校関係者評価などを、積極的に発信するためのホームページを充実。

重点	取組項目	具体的な取組内容	数値目標	達成度		「中間」自己（学校）評価(A~D)		「中間」学校関係者評価(A~D)		「年度末」自己（学校）評価（A~D）		「年度末」学校関係者評価（A~D）		次年度に向けた改善策
				９月	２月	評価	コメント	評価	コメント	評価	コメント	評価	コメント	
学力の向上	○授業改善の推進、学習の基盤となる基礎・基本の確実な習得、家庭学習習慣に対しての学校の組織的な対応による取組の実施・充実	・校内研究、校内研修を通じた授業改善	・児童への意識調査結果で、80%以上が、すすんで学習をしていると肯定的な回答	A	A	A	87%の児童が肯定的な回答をしている。13%に目を向け、対応をしていく。	A	研究や研修が計画的に進められているので、今後も継続的に進めてほしい。	A	肯定的な回答をする児童が83%と若干下がっているが、目標は到達できた。	A	連絡等の代わりにteamsを利用しての宿題提示はよいと思うが、保護者に家庭学習の内容が見えにくくなっている可能性がある。	全教員が児童理解を深め、主体的に学習に取り組める授業を展開できるよう、授業改善に努める。家庭学習も定着できるよう、保護者と連携を図れるようにする。
		・学校と民間事業者と連携した放課後補習教室の実施	・放課後補習教室参加者の参加率90%以上	A	A	A	参加者は、ほぼ毎回参加し、事業者とも確認をしている。参加人数に余裕の出た学年では新たに参加を促し、最大人数が参加できるようにしている。	A	基礎・基本の定着に向け、定員数に満たない学年の参加者を増やし、さらに取組を充実させてほしい。	A	参加人数は最大限利用できるように随時見直しながら実施できた。基礎・基本の学習内容の定着について、概ね達成できた。	A	次年度は形態が少し変わるようだが、継続して取り組み、学力向上を目指してほしい。	参加対象者を検討する機会を増やし、適宜、参加者の状況に応じて対象者を決定する。また、曜日を固定して参加を習慣化させ、毎週100%の参加率を目指していく。
	○読書科の更なる充実	・学校図書館の環境整備と学校司書の活用	・全学級、学期に３回以上の図書館活用	A	A	A	授業内容に応じ、計画的に図書館を利用できている。1学期は全学級実施できた。	A	インターネットを利用し調べることもできるが、書籍の充実を図り、本に触れて調べる機会をさらに増やしてもらいたい。	A	2学期も図書館利用を計画的に行えた。本棚を新しく設置したり、蔵書整理をしたりし、図書館の整備を行えた。	A	利用率はよいと思うので、読書記録から利用されている本の傾向をつかみ、利用できる書籍のさらなる充実が図れるとよい。	図書館支援員を活用した授業や環境整備、読書科の充実を図り。学校図書館の利用が増えるようにしていく。
		・教員やボランティアによる読み聞かせ読書活動の充実や読書時間の確保	・児童への意識調査結果で、80%以上が、すすんで読書をしていると肯定的な回答	B	B	B	肯定的な回答は79%であった。時間を設定すれば読書をするが、そうでないと個人差がある。	B	読書に対する意欲や時間の個人差は、家庭の環境にもよる部分もあるだろうが、学校では読書を促していってほしい。	B	肯定的な回答は76%で、若干下がった。図書に触れる機会が減っていることが要因に挙げられる。	B	学校だけでなく、家庭でも本に触れる機会をつくっていけるとよいのではないか。	読書週間の適切な時期を検討し、読書意欲が高まるイベントの計画を行う。委員会活動など児童が直接関われるように支援していく。
体力の向上	○体力向上に向けた運動意欲の向上	・各学期に2週間程度のなわ跳びチャレンジウィークの設定	・児童への意識調査結果で、80%以上が楽しく取り組むことができたと肯定的な回答	B	B	C	肯定的な回答は66%であった。今年度から始まり、４月に手探りで取り組んだので、２学期以降に調整を図っていく。	B	実施の時期を再検討し、年間の変容の様子を見ていってほしい。また、出前授業の様子も聞きたい。	C	肯定的な回答は67%であった。共通のカードを利用して取り組んだが、児童が意欲的になれる取組はできなかった。	B	１年目ということで、手探りだったと思う。運動技能を高める目的だけでなく、健康にもよい運動なので、しっかり取り組んでほしい。	カードの内容について再検討し、児童が目標をもちやすくする。授業時間・休み時間等に計画的に実施できるようにする。
		・マラソン大会実施とマラソン月間の設定	・児童への意識調査結果で、80%以上が体が動かすのが楽しいと肯定的な回答	B	B	B	肯定的な回答は80%であった。56%はとても好きと回答しているが、高学年になるほど否定的になる傾向がある。毎年の恒例行事で楽しみにしている児童も多いので、持久走を苦手とする児童の意欲を高められるよう努める。	B	体力テストの結果で、持久力は低めと聞いている。学校では体を動かす時間の確保をし、放課後も大きな公園が多いので、地域の施設を利用しての外遊びも促してほしい。	A	肯定的な回答は80%のままだったが、とても好きは62%まで伸びた。マラソン月間は、少しでも多く走ろう、記録を伸ばそうと意欲的に取り組む姿が多く見られた。	B	子供たちが、意欲的に運動に取り組んでいるのが良い。マラソンだけでなく、なわとびも含め、年間を通じて体力向上に取り組めるとよい。	体力テストの結果を分析し、本校の児童に必要なカを重点的に伸ばせるよう、年間計画を立てる。また、体力向上に関する取組について、時期や方法を検討していく。
共生社会の実現に向けた教育の推進	○校内の支援体制の充実	・特別支援コーディネーターや生活指導主任を軸とした、児童の実態把握と対応の共通理解	・教職員が週１回以上の情報共有の機会を設ける。	B	A	B	毎週金曜日の生活指導夕会での情報共有を軸とし、コーディネーターや生活指導主任が関係者をつなぎ、児童理解に努めている。	B	特別支援コーディネーターのように、調整役が学校内にいるのは頼もしい。連携を強め、漏れなく支援をしていってほしい。	A	情報のデータ化を推進したことで、組織的な対応の基盤づくりができた。児童や保護者の要望に即時対応できる体制作りも整いつつある。	A	支援が必要な子供は増えていると聞いている。今後も必要な支援を適切に受けられるよう、体制づくりをしていってほしい。	特別支援コーディネーターの補佐を増員し、多方面に調整しやすい体制を整える。また、支援委員会の分掌を見直し再編成し、さらに組織的な対応を可能にしていく。
	○ユニバーサルデザインの視点を取り入れた個に応じた指導の実施・充実	・巡回指導や特別支援教室専門員の活用、日本語指導員や日本語教室との連携	・毎月１回以上、管理職や通常学級担当教員と特別支援教育担当教員の打ち合わせを実施	B	B	B	巡回指導を検討する児童や日本語指導を必要とする児童が増えている。適宜、必要な情報を共有をし、対応・支援を行っている。	B	相対的に支援が必要な子供が増えていると思う。引き続き個に応じた対応を充実させてもらいたい。	B	個に応じた指導の実施を行うことはできた。校内での情報共有はできたが、通級担当教員との接続が困難であった。	B	一人一人の成長は、先生方の見取りが絶対的に必要になる。関係者同士での密な連携を期待する。	巡回指導に関する連携は、コーディネーターと専門員を活用し、充実させる。通級との連携は、校務支援ソフトを活用し、充実させていく。
	○副籍交流、交流及び共同学習の実施充実	・年間指導計画に基づいた交流及び共同学習の実施	・各学期１回以上の実施	B	B	B	実施はできているものの、交流というところまで至らないことが多い。通常の学級担任が特別支援学級で授業を行う機会を設け、教員のさらなる児童理解、交流促進のきっかけを模索している。	B	本校は特別支援学級があるので、共生社会を生きていける児童の育成に努めてほしい。出張授業の形態は良い挑戦だと思う。今後、変容について聞いてみたい。	B	校内での児童交流は、計画通り実施してきた。教員の出張授業により、児童理解も進んだことから、交流を深められる計画を立案していきたい。	B	学年ごとだったり、特別支援学級全体だったり、いろいろな場面があってよいと思う。子供たち同士の交流が日常的にできるよう、多方面で計画をしていってほしい。	校内の交流計画については、明文化し、さらなる充実を図っていく。特別支援学校との副籍交流は、希望に応じて対応していく。
不登校・いじめ対応の充実	○豊かな心の育成	・係・当番活動、委員会活動やクラブ活動、きょうだい学級遊びなど異学年交流の充実	・年間3回以上、いじめ問題に関する道徳授業の実施	B	B	B	各学級、計画通り授業を行っている。特別活動における交流については、部会内で振り返りを行い、次年度に向け検討を重ねている。	B	非常に落ち着いた学校であり、今までも大きな問題はないと聞いている。今後とも継続して様々な取り組みをしていけるとよい。	B	特別活動における取組は、計画通り実施できた。様々な場面で異学年交流もでき、休み時間に上級生が下級生に声をかけ、遊ぶ姿も多く見られた。	B	いじめは直接的なものだけでなく、ネット内でも起こる。SNSの指導にも力を入れ、今まで以上に、いじめ防止に努めてほしい。	教育計画作成にあたり、生活指導を中心にいじめ防止の取組を組織的に行えるようにする。また、特別活動の取組を通し、児童が互いに理解し、協力しながら共に成長できる指導を行えるようにする。
	○hyper-QUの活用	・QUテストの児童の実態把握に基づいた指導の推進	・年に１回校内でQU研修会を実施	B	B	C	実態把握については活用できたが、研修会は実施できていない。学級経営に役立てられるように努めていく。	B	その時の状況にもよって変わるものだろうから、参考にしつつ、先生たちの目で実態把握をしていってほしい。	C	日常的に共有した情報を基に対応することがほとんどであった。QUの結果はその時の状況であるため、参考にとどまった。	B	中間評価と同じように、資料の一つに過ぎないので、日々の子供たちの様子に目を向け、対応していってほしい。	次年度はQUテストを実施しないことから、週１回行う生活指導夕会での情報共有、年３回行ういじめアンケートなどを基に、いじめの未然防止、早期発見・早期対応を行っていく。
	○教育相談の強化	・スクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカー、関係諸機関との連携強化	・不登校児童とのＳＣ、ＳＳＷ連携率100%	B	B	B	SCとつなげられることは多いが、SSWとの連携に苦慮している。個々の状況に応じ、適切な支援ができるようにしていく。	B	登校渋りや不登校が増えていることは心配。丁寧に対応していき、みんな楽しく学校に通えるようにしていってほしい。	B	児童の困りごとについて、保護者と連携するとともに、概ねＳＣやSSWにつなぎ、対応することができた。	B	登校が難しい子供の数は、社会的にも問題になっている。本校の割合は少なだが、ゼロではない。学校と保護者、地域など一丸となって対応したい。	SCだけでなく、SSWの活用も注力していく。校内環境として居場所づくりを進め、関係諸機関とも連携し対応にあたる。
地域社会に開かれた学校（園）の実現	○学校（園）ホームページの充実等	・学校ホームページの充実	・各学年、月2回以上の更新を行う。	B	A	B	頻度としては、十分な回数の更新ができている。不定期にはなっているので、計画的に進めるとともに、教育活動を分かりやすく発信できるように努めていく。	B	学年だけでなく、集会や行事の様子なども見られ、ときに先生方の様子も見られてよい。学校日記以外の部分も充実できるとさらによい。	A	各学年・専科等が月に2回以上の更新を目標に取り組み、１ヶ月で４０回程度のできごとを配信した。お便り関連も毎月アップすることができた。	A	学校の様子はよくわかり、素晴らしい頻度だと思う。子供たちの活躍を多くの方に知ってもらい、三葛西をアピールしていってほしい。	毎月多くの活動を配信したが、学年による偏りが見られた。次年度は、全学級がバランスのよく発信できるように努める。また、行事予定や校内研究などもアップできるようにしていく。
	○学校関係者評価の充実	・児童、保護者、地域、教職員へのアンケート調査の実施 ・評価項目の見直し	・保護者アンケート回収率８０%以上	—	B	—	本評価に係る項目に加え、現在、評価項目を精査している。事前に評価していただく内容を通知し、QRコードによる回答を推進することで、回収率向上を目指す。	—	評価について、答えやすくすることが大切だと思う。回答のしやすさ、負担感のなさなども含め検討してほしい。	C	回収率は概ね６０%程度にとどまった。複数回案内を送り、期間を延ばしたが、大きな伸びは見られなかった。	B	一般的にオンライン回答だと、回収率が２０～４０%程度と言われる中では高いのではないか。６０%程度あれば、結果の精度も悪くないと思う。	紙での実施の方が回収率は上がるかもしれないが、集計や分析の観点からも、オンラインでの回答を継続していく。見直した項目結果は、次年度以降は比較したり、推移を分析したりする。
特色ある教育の展開	○働き方改革の推進	・会計年度任用職員の効果的な活用と、週に１回の定時退勤日の設定	・全教職員の月残業時間65時間以下	B	A	B	現状９０%以上の職員が達成している。週に１回、リフレッシュデーと命名した定時退勤日を設け、意識の向上を図っている。さらに、働き方改革を推進し、短縮に努める。	B	先生方が忙しいのは承知している。45時間以内という数値に近づけることで、先生たちが健康でいて、元気に児童に接していってもらいたい。	A	毎月ではないが、現状、ほぼ１００%達成できている。意識改善が図られ、残業時間の短縮に向けた雰囲気が醸成されている。	A	改善されていることは、とても良い。次は全教職員が45時間以内となるように、さらに努力していってほしい。	校内における分掌の再編等により、業務の効率化を進めていく。教員が児童と向き合う時間の確保、授業準備に充てられる時間の確保を目指し、次年度の計画をしていく。
	○地域環境を生かした学習活動	・大規模公園を使用した行事や、近隣にある施設、店舗等との連携	・全校で年間８回以上の実施	A	A	A	春に、全校オリエンテーリングを宇喜田公園で行った。秋以降も計画通り実施していける予定である。	A	地域に密着する活動はよい。地域の施設や人材をさらに活用していけるとよい。	A	予定通り行い、計画されたもの以外にも実施することができた。	A	地域にある施設をよく知り、地域行事にも参加してくれるようになるとよい。	今後も継続して学習活動を行う。葛西地区の区行事や近隣自治会行事など、ポスター掲示やtetoru配信で周知していく。